

自己の生き方について考えを深める道徳科授業の在り方
～発問と振り返りの工夫を通して～

錦江町立大根占小学校 教諭 小湊 まりや

目 次

1 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2 研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

 (1) 研究主題

 (2) 研究主題設定の理由

3 研究の構想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

 (1) 研究のねらい

 (2) 研究の仮説

 (3) 研究の内容

4 研究の実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

 (1) 仮説Ⅰについて

 (2) 仮説Ⅱについて

5 研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

6 おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

〔引用・参考文献〕

・『小学校学習指導要領解説 総則編』	文部科学省	平成29年
・『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』	文部科学省	平成29年
・道徳教育学習指導要領Q&A	県総合教育センター	
・県総合教育センター短期研修資料	県総合教育センター	
・『大隅学力向上リーフレット(令和4・5年度版)』	大隅教育事務所	
・『かごしまの「道徳的価値分析本」』	県小学校教育研究会道徳部会	令和3年
・県小学校教育研究会道徳部会夏季研修資料	県小学校教育研究会道徳部会	令和4年
・『考え、議論する道徳をつくる 新発問パターン大全集』	道徳教育編集部	令和元年
・『道徳板書スタンダード&アドバンス』 有松浩司	明治図書	令和3年
・『ゼロから学べる道徳科授業づくり』 荒木寿友	明治図書	平成29年
・『道徳科 授業構想グランドデザイン』 浅見哲也	明治図書	令和3年
・『おもしろすぎて授業したくなる道徳図解』 森岡健太	明治図書	令和3年
・『考えるツール&議論するツールでつくる 小学校道徳の新授業プラン』 諸富祥彦, 土田雄一	明治図書	令和2年

1 はじめに

教員になって今年度で 10 年目を迎える。経験を重ね、中核を担うことを求められるようになってきている。しかし、時代や児童の変容についていけず、学習指導や学級経営で悩むことも多い。その一つに、「特別の教科 道徳（道徳科）」の指導がある。私の道徳科の授業は、登場人物の気持ちを考えて終えるような心情理解中心の授業になってしまったり、価値観のおしつけや上辺だけの授業になってしまったりすることが多い。正直、何をどのように指導したらよいのか分からない。そのような中、昨年度から本校で道徳科の研究が始まった。そこで、自身の道徳科の授業の在り方を見直すチャンスと思い、取り組むことにした。

2 研究の概要

(1) 研究主題

自己の生き方について考えを深める道徳科授業の在り方
～発問と振り返りの工夫を通して～

(2) 研究主題設定の理由

ア 社会情勢から

平成 25 年 12 月の「道徳教育の充実に関する懇談会」報告では、道徳教育について「自立した一人の人間として人生を他者とともによりよく生きる人格を形成することを目指すもの」と述べられている。今後グローバル化の進展、科学技術の発展、社会・経済の変化等の中で出くわす課題に対応していくためには、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、よりよい方向を目指す資質・能力を備えることが重要である。そのため、学校教育における道徳教育では、人が互いに尊重し協働して社会を形作っていく上で、共通に求められるルールやマナーを学び、規範意識などを育むとともに、人としてよりよく生きる上で大切なものとは何か、自分はどのように生きるべきかなどについて、時には悩み、葛藤しつつ、考えを深め、自らの生き方を育んでいくことが求められる。しかしながら、読み物の登場人物の心情理解のみに偏った指導や特定の価値観を押し付け、主体性をもたせず教師が言うままに行動させる指導が行われる例も実態としてある。私もその一人である。

このことから、道徳教育の改善・充実に取り組むため、発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」へと転換を図る必要があると考えた。

イ 本校の教育目標から

本校は、「心豊かで、たくましく、学ぶ意欲にあふれる大根占の子」を学校教育目標とし、児童や地域の実態に即した知・徳・体の調和のとれた、主体的に活動する児童の育成に努めることを学校経営の基調と定めている。また、学校経営の基本方針の一つに「人権同和教育の観点に立った学習指導を充実・発展させ、人権感覚の醸成と自他ともに尊重しようとする実践的な態度の育成」や「体験的な学習や問題解決的な学習を発展的・横断的に充実させることにより、主体的で対話的な深い学びを追究し、自ら学ぶ意欲と態度を育てる」ことを定めている。

このことから、本研究主題を考え、模索することで、児童が道徳的な課題を自分自身の課題として捉え、向き合うことができるようになれば、本校の教育目標の実現に近づくのではないかと考えた。

ウ 児童の実態から

本学級の児童は、道徳の授業や話し合い活動が好きな児童が多い。教材に出てくる問題場面や道徳的価値について考え、ほぼ毎時間、全員が発表するくらい意欲的に授業に参加している。しかし、中には教材に出てくる人物の立場になって考えられず、話し合いで出てきた考えを自分の考えとして発表する児童もいる。また、教材から離れ、自分自身を振り返る活動になると、どこか他人事であり、「これからは気を付けたい。」という具体性のない振り返りになる児童も多い。さらに、実践意欲はあるものの、日常生活への道徳的態度には結び付かない現状もある。

このことから、道徳教育を通じて、個人が直面する様々な状況の中で、そこにある事象を深く見詰め、自分はどうすべきか、自分には何ができるかを判断し、そのことを実行する手立てを考え、実践できるようにしていく必要があると考えた。

以上のような理由を踏まえ、本研究主題を「自己の生き方について考えを深める道徳科授業の在り方～発問と振り返りの工夫を通して～」とし、児童が主体的に考え、議論する授業づくりについて研究を進めた。

3 研究の構想

(1) 研究のねらい

道徳教育の充実を図るため、道徳科を要として道徳教育の趣旨を踏まえた効果的な指導を学校の教育活動全体を通じてより確実に展開することができるよう、小学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」では、従前の規定を次のように改善したと述べている。

道徳的価値について自分との関わりも含めて理解し、それに基づいて内省し、多面的・多角的に考え、判断する能力、道徳的心情、道徳的行為を行うための意欲や態度を育てるという趣旨を明確化するため、従前の「道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め」ることを、学習活動を具体化して「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習」と改めた。

また、道徳教育の指導内容と児童の日常生活について、「小学校学習指導要領解説 総則編」では、次のように述べている。

道徳教育で養う道徳性は、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となるものである。日常生活においても、人から言われるからといった理由や周りのみんながしているからといった理由ではなく、物事を多面的、多角的に考え、自らの判断により、適切な行為を選択し、実践するなど、道徳教育の指導内容が児童の日常生活に生かされるようにすることが大切である。

本研究では、以上のことを踏まえ、自己の生き方について考えを深めるために、児童が主体的に考え、議論する授業づくりを中心に研究し、従前の国語のような授業や上辺だけの授業、価値観の押し付けからの脱却をねらいとしている。

(2) 研究の仮説

仮説Ⅰ： ねらいを明確にし、道徳的価値に基づいた発問の工夫をすれば、児童が主体的に考え、議論することができるのではないか。

「児童が主体的に考える」とは、児童一人一人が、これまでの自分の生活経験を基にして、道徳的課題を自分事として捉え、多面的・多角的に考えることとする。また「議論する」とは、友達考えに触れ、自分の考えを広げたり深めたりすることとする。

仮説Ⅱ： 振り返りを工夫すれば、自己の生き方についての理解を深めることができるのではないか。

「自己の生き方について理解を深める」とは、道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止める、他者の多様な感じ方や考え方に触れることで身近な集団の中で自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を見つめる、これからの生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いをもつこととする。

この2つの仮説を基に、「特別の教科 道徳」における目指す児童像を次のように設定した。

【「特別の教科 道徳」における目指す児童像】

- ・ 友達との関わりを通して、互いを認め合い、道徳的価値についての理解を高め合う児童
- ・ これまでの自分を振り返り、学習したことを生活の中で生かすことができる児童

(3) 研究の内容

仮説Ⅰ，Ⅱに対する具体的な研究内容を次のように設定した。

仮説Ⅰ：【研究内容1】	仮説Ⅱ：【研究内容2】
ア 道徳的価値に基づいた発問の工夫 イ 児童が主体的に考え、議論する工夫 ウ 児童が考えを深める工夫	ア テキストマイニングツール(*)による振り返り イ 「振り返りカード」の活用 ウ 「道徳コーナー」の設置

*: テキストマイニングツール(株式会社ユーザーローカル)

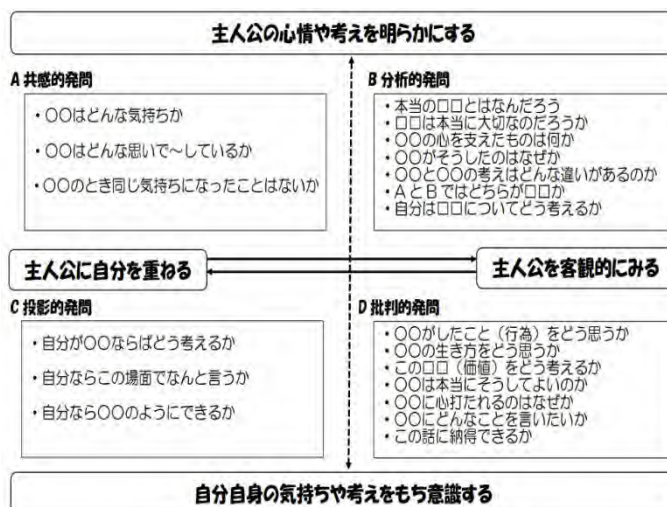
4 研究の実際

(1) 仮説Ⅰについて

仮説Ⅰ： ねらいを明確にし、道徳的価値に基づいた発問の工夫をすれば、児童が主体的に考え、議論することができるのではないか。

ア 道徳的価値に基づいた発問の工夫

道徳的価値に気付かせるために、教材としっかり向き合わせる必要があると感じた。その際、心情読解的な発問に偏らないように、「発問の立ち位置」をはっきりさせ、教材と向き合わせることが大切となる。そこで、東京学芸大学の永田繁雄教授が提唱する「発問マトリクス」を活用することにした。「発問マトリクス」とは、発問の立ち位置を整理したものであり、教材と向き合う展開場面を中心に活用することができる。これを活用することで、児童の主体性や考えの広がりや深まりも変わると考えた。



【資料1 永田繁雄教授が提唱する「発問マトリクス」】

そこで、学習指導案にも次のように発問計画、各発問の分類まで明記するようにし、教師自身の意識化につなげられるようにした。これは、第6学年の自由と責任について考える「自由行動」という教材と向き合う展開部分の指導案である。授業をするに当たって、発問計画は従前から立てているが、指導案に明記することで何を目的としてこの発問をしているのかと、より意識して授業に臨むことができるようになった。

- ・分析的発問
- ・批判的発問

【資料2 発問の種類を明記した学習指導案】

また、発問マトリクスを活用することで、発問の立ち位置がはっきりし、主人公に自分自身を重ねるか、客観的に見るか、主人公の内面や行為の理由を明らかにするか、自分自身の考えを明確にするのかなど心情読解に偏らない発問を考え、実践することができるようになってきた。そして、その発問によって、児童が自分事として考えられた場面もあった。これは、本校職員が第2学年の親切、思いやりについて考える教材「くりのみ」で実践した場面である。

5 きつねはその後、うさぎさんとどんな話をするのでしょうか。

発問：「この後、きつねがうさぎに何と何と言うか想像して書きましょう。」

↓

発問：「それでは、自分がきつねの立場だったら何と何と言うか考えて書きましょう。」

【資料3 第2学年：「くりのみ」の学習指導案】

上記のように、きつねとうさぎのやりとりを「想像して書きましょう。」ではなく、「自分がきつねの立場だったら何と何というか考えて」という、「投影的発問」を活用した場面があった。一見すると、同じような発問にも思えるが、最初の発問は下学年の発達の段階では難しいと感じる。下学年の発達の段階においては客観的に考えさせるより、教材の登場人物になりきって主観的に考えさせたほうが想像しやすいと考える。このことを踏まえ、「自分だったら」という主人公に自分を重ねて考えさせる発問にすることで、次のような考えが出てきた。

児童：「ありがとう、うさぎさん。そして、ごめんなさい。」

【資料4 児童のワークシート】

このように、「自分だったら何と何というかな。」と、きつねに自分自身を重ねて考えられた児童が多くいた。

これは一例であるが、今年度第3学年の担任である私の学級でも客観的に見て気持ちを想像することが難しい場合は、投影的発問をすることがある。この発問マトリクスを知ったことで、発問の幅が広がり、児童と教材との向き合わせ方にも多様な考え方ができるようになってきた。

イ 児童が主体的に考え、議論する工夫

授業の主体は、児童である。従前の「道徳的価値を教える」授業では道徳性が十分には養われない児童が、道徳的課題について多角的な視点から自分で考え、話し合いの中で自分の思考を深めていくことが求められている。しかし、何をどのように考えればよいのか分からない児童もいる。また、多様な考えを引き出すにはどうしたらよいのか、話し合いが意見の交流に留まってしまうという教師側の悩みもある。そこで、児童が筋道立てて考えられるよう、また目的をもって友達と意見交換ができるように「思考ツール」を活用することにした。「思考ツール」とは、「可能な限り、すべての立場、すべての視点に立ってものを考え、話し合っていくという道徳的な思考や話し合いに特徴的な思考や議論の型を予め組み込んであるものである。

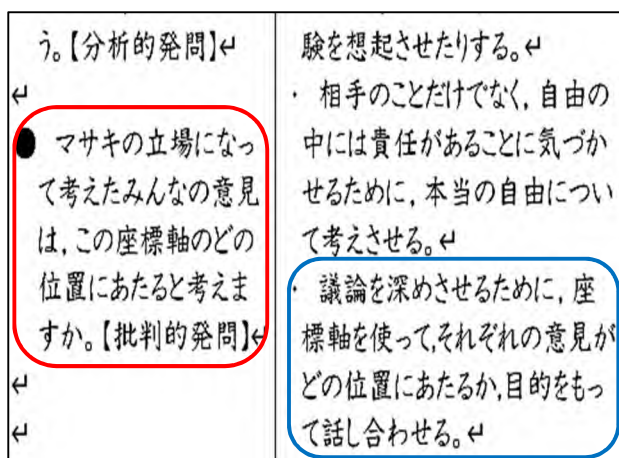
実際に、児童が筋道立てて考えられるよう、ロイロノート（株式会社LoiLo）の思考ツール「キャンディーチャート」を活用してみた。「キャンディーチャート」とは、左側に「もし～ならば」という前提となるものを書き、中央にその結果を書く、そして右側にそう考えた理由を書くものである。



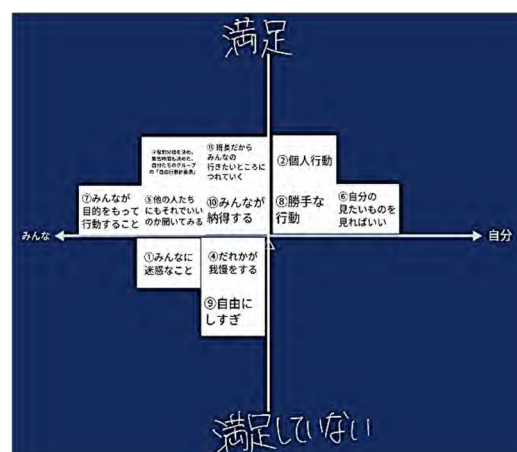
【資料5 キャンディーチャート】

上記は、昨年度第6学年で「礼儀正しいとはどういうことか」を考えたときに活用したものである。このように、何を考えて書くのが明確になっていれば、目的に沿った考えができる児童が増えたように思う。しかし、4割程度の児童は、書き表し方が分からずに困っていたので、使い慣れていないと活用することが難しいとも感じた。

また、目的をもった話し合いができるように、ロイロノートの思考ツール「座標軸」を活用してみた。「座標軸」とは縦軸と横軸の基準に対してどのような位置にいるかを示したものである。

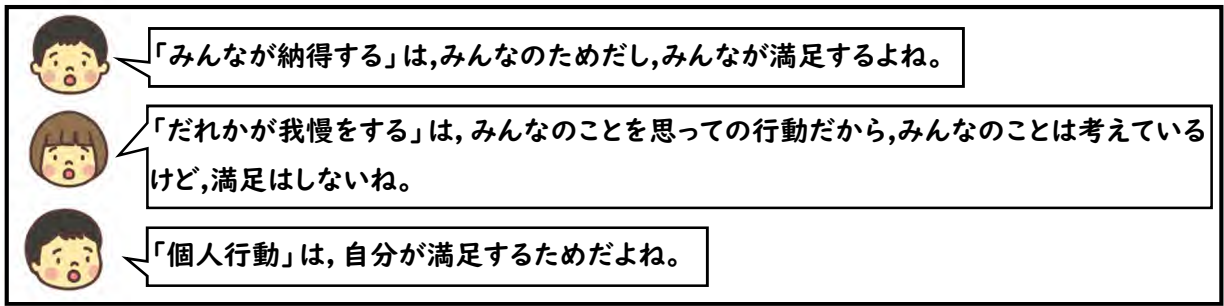


【資料6 話し合いを設定した学習指導案】



【資料7 話し合いに活用した座標軸】

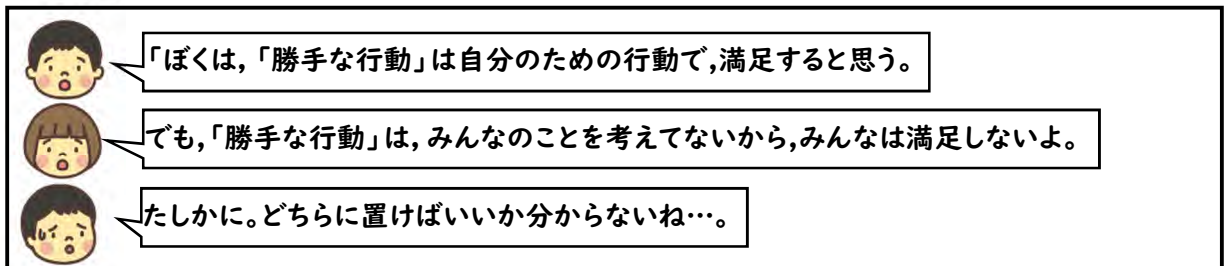
上記は、第6学年の自由と責任について考える「自由行動」の教材での活用場面である。それぞれの考えは、「自分のためなのか、みんなのためなのか」また「満足しているか、満足していないか」という基準で話し合いながら整理をさせた。その結果、以下の話し合いが見られた。



【資料8 話し合いの様子】

このように、意見カードを動かしながら理由も添えて話し合う姿が多く見られ、基準があることで、みんなが目的を理解し、同じ目的に向かって普段より意欲的に、そして活発な話し合いが行われた。

しかし、以下のような話し合いも見られた。



【資料9 話し合いの様子】

このように、基準にした文言が児童を混乱させ、目的とは違う論争が起こったグループもあった。このことから、基準の文言や思考ツールの選択によっては、児童を混乱させたり、ねらいとする話し合いからずれてしまったりすることも分かった。

ウ 児童が考えを深める工夫

話し合いを深めるためには、問いかけ方を知らない話し合いを広げることができないと考える。実際自分の考えを紹介し合って終わることが多かった。そこで、本校では考えを広げたり、深めたりするための「問いかけカード」を作成した。

すると、だんだん相手の意見を聞いて終わりではなく、友達のことをしっかり聞き、「どうしてそう思うの。」「自分なら、そうされていいかな。」というように、更に問いかけて、より詳しく友達の意見を知らうとする児童が増えた。

その一方で、全てを活用するには難しい学年もあり、発達の段階に応じた「問いかけカード」の作成の必要性を感じた。

問いかけカード

- ☆ どうしてそう思うの？
- ☆ つまり〇〇ってこと？
- ☆ たとえばどういうこと？
- ☆ でも・・・とき、難しいんじゃない？
- ☆ 自分なら、そうされていいかな？
- ☆ 今までに同じようなことがなかったかな？
- ☆ 〇〇さんなら・・・のことどう思う？

【資料10 問いかけカード】



【写真1,2 問いかけカードを活用した話し合いの様子】

(2) 仮説Ⅱについて

仮説Ⅱ： 振り返りを工夫すれば、自己の生き方についての理解を深めることができるのではないか。

を通した自己の振り返りをしっかりしている振り返りの内容に変わってきた。また、最初は書くことに時間がかかったものの、最近では約5分で右のように書く児童も増えてきている。

また、この「振り返りカード」については、その時間に書いて終わりではなく、蓄積していくことで1年を通して振り返ることができると思う。そこで、本校では使用している日本文教出版の教科書に合わせて4つの価値項目に色分けをして蓄積している。



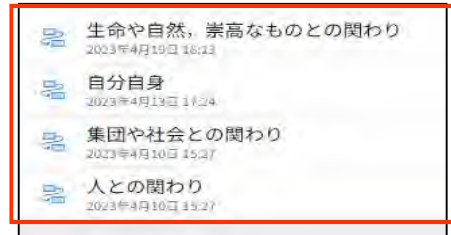
【資料16 色別の振り返りカード】

- 主として自分自身に関すること
- 主として人との関わりに関すること
- 主として集団や社会との関わりに関すること
- 主として生命や自然,崇高なものとの関わりに関すること



【資料15 児童が書いた振り返り】

1年生から4年生は、紙媒体でファイリング化、5・6年生はロイロノートに4つの価値項目のノートを作成し、データで保存している。こうすることで、同じ価値項目の授業のときには、これまでどのような学びをしてきたのかを簡単に振り返ることができる。



【資料17 価値項目に分けたロイロノート】

ウ 「道徳コーナー」の設置

授業での学びを日常生活に生かしていくことが望ましい。そのためのきっかけづくりとして道徳コーナーを設置することにした。1授業をA3サイズ1枚でまとめるようにしている。上には、授業の板書を、下には数人分の児童の振り返りを教師のコメントも添えて掲示している。

授業をするごとに更新され、友達の振り返りを見られることから、児童が興味をもって見るようになり、友達と自分の考えを比べたりする児童も見られるようになった。



【写真3 道徳コーナーで語り合う児童】



【資料18 価値項目に分けたロイロノート】

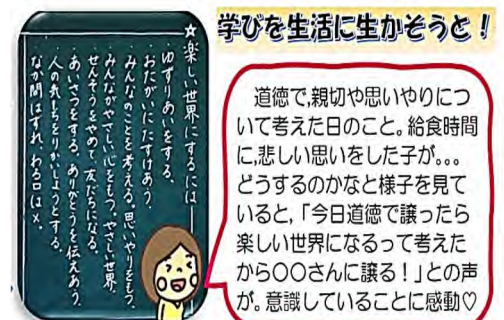
5 研究のまとめ

本研究主題において、仮説Ⅰ・Ⅱを立て、目指す児童の姿に近づくために、仮説Ⅰでは発問、思考ツール、話し合いの工夫を、仮説Ⅱでは授業前・授業後の道徳的価値の変容の見取り方、振り返りカードの工夫、生活に生かす手立てを具体的な研究内容を考え、実践を行ってきた。すると、実践する中で見えてきた成果と課題がたくさんあった。大まかに整理すると以下ようになる。

	仮説Ⅰ	仮説Ⅱ
成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発問マトリクスを活用することで、登場人物の心情や考えを明らかにさせたい場面と、自分自身の気持ちや考えをもち意識させたい場面をしっかりと考えて教材研究をし、発問するようになった。 ○ 思考ツールの活用によって、順序立てて自分の考えを書く児童が増えたり、全員が同じ目的をもった意味のある話し合いができた。 ○ 「問いかけカード」の活用により、話し合いが互いの意見の伝え合いで終わることなく、児童どうしの対話を通して自身の考えを明確にしたり、考えが変容したりして深まりのある話し合いになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「テキストマイニングツール」を活用することで、児童の道徳的価値に対する理解や変容が視覚的に捉えられるようになった。 ○ 「振り返りカード」をダイヤモンド・サイクルの観点にすることで、授業での学びとこれまでの自分や今後の自分について具体的に考えることができた。さらに、「振り返りカード」を蓄積することで、これまでの学びや自分の考えを意識する児童が増えた。 ○ 「道徳コーナー」を見て、児童が学習を常時振り返り、日常生活でも意識して実践する姿があった。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 登場人物の心情や考えを明らかにさせたいのか、自分自身の気持ちや考えを意識させたいのかが不明確だったり、考えた発問で児童の考えを十分に引き出せなかったりした。 ● 思考ツールの活用が目的となり、深まりのない授業になったり、指標によっては考えを狭めてしまい、個々の考えが生かされなかったりした。 ● 「問いかけカード」により、理由や具体的場面を話すようになったが、上手く説明できない児童にとっては、苦手意識が強まった。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「テキストマイニングツール」で児童の変容を捉える際、アンケート内容によっては時間を要することが多かった。 ● 「振り返りカード」をファイル化しているが、常に目に見えるように、掲示したら継続した意識化につながるのではないかと感じた。 ● 道徳コーナーを毎週更新していたが、変化に乏しく、だんだん児童の関心が薄れていった。 ● 授業が終わった1～2日間は意識して実践する姿が見られるが、日常生活へと継続して意識させることが難しかった。

6 おわりに

本校での道徳科の研究が、私自身の道徳科授業の在り方を見直すきっかけとなった。学習指導要領の解説、道徳科の発問や思考ツール、板書関連の書籍等も意識して読んだり、授業を参観・実践したりし、以前の私よりレベルアップしたように思う。それに伴い、担任する学級の児童の道徳科の授業への積極性が高まってきたように感じる。それは、全員が自分の考えを発表する又は友達と活発的に話し合う姿から見てとれる。また、日常生活の中でも生かそうとする場面も見られる。私自身の道徳科授業への意識の変容が、児童へもよい変化をもたらしている。まだまだ、授業に関しては改善しなければならないし、児童の実態に合わせて変わっていかなければならない。現状に満足することなく、今後も児童とともに、物事を多面的・多角的に考え、よりよい道徳科の授業の在り方を探っていきたい。



【資料 19 学びが生活に生かされた場面】